

当学会について

学会の活動

学会誌「CSF」

会報「細胞生物」

入会案内
各種変更届

実験情報

細胞生物学用語集

リンク集

会報「細胞生物」

■ 会報「細胞生物」トップページ

- 最新号Contents
- 会長挨拶
- 過去のContents
- 巻頭言一覧
- CSFニュース
- 集会揭示板
- 公募・求人情報
- 賞および研究助成
- 議事録
- 訃報一覧
- 賛助会員
- 会員専用

ホーム > 「細胞生物」トップページ > 巻頭言トップページ > Vol.11 March (1) 21世紀は女の時代 -個性、輝くとき-

Vol.11 March (1) 21世紀は女の時代 -個性、輝くとき-

原口 徳子 (郵政省通信総合研究所)

古来、日本では首尾一貫して物事に取り組むことが尊ばれてきた。武士が主君に仕えることしかり、現代ではサラリーマンが一つの会社で定年まで働きつづけることもそうで、研究の世界でも「〇〇先生は、30年間、首尾一貫して〇〇の研究を続けられ、優れた業績を……」などと紹介されるところをみると、首尾一貫することがいいという意味なんだろうと思う。「一所懸命」とか「一生懸命」という言葉は、12世紀の頃、武士が台頭してきたころに作られた言葉だそうで、文字どおり「ひとつの所で命を懸けてほしい」主君にとってはその言葉はたいへん都合が良かったのだと思う。それを思うと、「女心と秋の空」の例えのごとく、移ろいやすい女の行動が、男社会で信用されなかったのも道理である。

しかし、物事というのは、反対から眺めてみれば全く反対の面が見えてくるものである。12世紀というのもついでに反対にしてしまっ、時は、21世紀。世の中は、日進月歩の勢いで目まぐるしく変化を遂げている。この変化に、古典的な「首尾一貫」性だけで太刀打ちできるのであろうか。今こそ、女の本来持ついい加減さ（融通性とは柔軟性と言っても良い）が大変な利点となる。女性にとっては、その性質を活かす千載一遇のチャンスが、有史以来初めて到来したのである。

先生「××君、〇〇酵母の研究も面白いんだけど、これからは〇虫の研究も面白そうなんだよ、ゲノム情報もう分かっているし、一応、生殖系列から脳細胞まで揃っているしね、ノックアウトも簡単なんだそうだよ。君、やってみないかね。」

男性研究員「……………」

女性研究員「先生、それ面白そうですね。あののたくっている姿も、結構、かわいいし。私、このところ〇〇酵母の研究も少し飽きて来てたところなんです。それ、私にやらして下さい。」

なんて話も聞こえてきそうだ。（注：登場人物は全てフィクションであり、実在の団体、個人とは何の関係もありません。）なんのこだわりもなく、責任感もなく、一貫性もなく、さっと新しいことに融け込むのはやはり女性の専売特許ではないかと思うのである。これから新しいプロジェクトを始めようと思っている皆さん、だまされたと思って女性研究者を雇ってみませんか。きっと上手くいくこと請け合いです。（但し、私は責任取りませんが。）それに、誰かの研究によると、マウスでは、ある遺伝子の制御により、オスの持つ攻撃性が決してメスには向けられないようになっているそう。男性ばかりの組織で、権力争いが絶えないところはありますか？この特効薬としては、女性の比率をもっと増やせば無用な争いを避けられるんじゃないのということになります。（これも、私は責任取りませんが。）女性の能力というこの人類共通の資源は、廉価、効率的、友好的、ファジー機能付き、無尽蔵と利点を挙げたらキリがないほど素晴らしい。21世紀には、この資源を有効利用した国だけが国際競争に勝つ、と言っても過言ではない！かな？と思っている。21世紀中頃に行われる某女性研究者の紹介スピーチでは、「〇〇さんは、その類いまれな首尾キメラ性で、多所不懸命に研究をされ、はちゃめちやな業績を……」などとお8いうのも現れるかもしれないなあ（んな訳ないか）、と楽しんでいるのである。

生きた細胞を毎日眺めて暮らしているととても楽しい。細胞は一つひとつとても個性的だ。その個性あふれる細胞を生き物として丸のまま受け入れているのが細胞生物学である。細胞生物学は、まさにその個性あふれる細胞のそれぞれの個性を尊重する学問である。細胞にも個性があるが、観察する方にも個性がある。ノンビリ屋は、長ーく観察しなければ見つけられないことを見つけるし、時間のない人は、短期決戦タイプの現象を見つける。失敗ばかりするヤツだって、失敗したからこそ見つけられたような現象を見つけてくるから生細胞観察はやめられない。まさに、細胞の個性と観察する人間の個性のぶつかりあいの中から成果が生まれる。細胞生物学には、学生も先生もなく、マイノリティーもマジョリティーもなく、男も女もなく（女の人、ゴメンなさい、すぐ裏切っちゃった）、ただ「個性」のみが存在する。21世紀は、私たち一人ひとりの個性を花開かせる時である。

MBL 株式会社 医学生物学研究所

株式会社医学生物学研究所

MHCテトラマー4品目および
CTL誘導ペプチド4品目 新発売
www.mbl.co.jp

[会報「細胞生物」
最新号Contents](#)
[会長挨拶](#)
[過去の細胞生物の
Contents](#)
[巻頭言](#)
[CSFニュース](#)
[Communication](#)
[集会掲示板](#)
[賞および研究助成](#)
[議事録](#)
[訃報](#)
[特別会員](#)

巻頭言 Vol.11 No.2

21世紀は男の時代 -いつもこころはホームラン-

平岡 泰 (郵政省通信総合研究所)

21世紀は女の時代? いやいや、21世紀こそは男の時代。21世紀にはこの国も変わる(と思いたい)。郵政省も消滅する。時代の流れの中、社会の生産性を上げるにはどうしたらよいか。精神論では何も変わらない。制度が変われば意識は変わる。価値観の多元化、雇用形態の多様化、雇用の流動化、選択の幅は広ければ広いほど望ましい。今、自由な選択を満喫しているは、女性である。男は社会のしがらみに束縛されてきた。男が現在に縛られている間に、女性は屈託なく新しい未来を受け入れる。今こそ男を呪縛から解放しよう。願わくは、私も妻に養ってもらって悠々自適にサイエンスをしたい。能力があろうがなかろうが、男ばかりが仕事をしなければならないのはよくない。女性にも能力に相応の仕事をしてもらおう。能力さえあれば、男も女もなく、責任ある職務についてもらう。そうすれば、男だからといって、無理に仕事をしなくてもよくなる。がまんして仕事を続けることはない。いやならやめる。気軽にやめる。いいのがあれば乗り換える。男女関係と同じである。この流動性によって男女関係も職場関係も最適の組み合わせに落ちつき、生産性が上がる。

仕事をする上では、男も女もない。Be professionalに尽きる。一方で、男と女は互いに理解し合えないと知っておくことも、また重要である。理解できないものとあきらめて、プロフェッショナルな信頼関係に期待するだけである。明らかに男と女は違う。男に「このボールペン、どこで買った?」と聞くと、「どこそこで買った。」という返事が返ってくる。同じ質問を女性にすると、すぐには返事が返ってこない。いろいろなことを考えるらしい。(なぜ、そんなことを聞くのだろうか。何か、不都合があったのだろうか。責められるだろうか。ひょっとして、ボールペンの持ち主に關心があるのだろうか。)といったことを、めまぐるしく考えるらしい。女性に対しては、質問の意図を明確にして、不安を取り除かなければならない。例えば、「うちの娘がこんなボールペンを欲しがっているんだけど、どこで買った?」と聞くと、安心して答えられるという。そんなバカな、と思いつつ、うちの女性スタッフに真偽を聞いてみた。すると、「そりゃ、考えますよ。男の人は考えないんですか?」と言われた。こいつは手ごわい、手に負えない。

男は単純である。女は複雑である。個体差もあるが、性差も大きい。私は男の中の男、最も単純な部類に属し、地球最大の単細胞生物と呼ばれる。男は、その単純さのために、有史以来、女に弄ばれてきた(私だけ?)。男女が互いに理解できると誤解するところから、問題が生じる。女性は、男も自分と同じように複雑であると思うから、深読みをしてすれ違う。男は犬のようなものと思えばがまんできる。飼ひ慣らされる前は、狼だったりする。いきなり吠えたり噛みついたりする。そこに深い意味はない。ただ吠えたくなれば吠える。まあ犬だからと思ってあきらめることである。適当に吠えさせて、自分のほうが偉いと思いをさせておけば、幸せに走り回っている(私だけ?)。当面は、利用できるかぎり利用するのがよい。

さて、男であるか女であるかは個性の一部にすぎない。男も女もなく、21世紀は生命科学の時代。自然に対する我々の理解は、しよせん現在の科学のレベルによって制約されている。大切なことは、自然が黙示する間に気づくこと。ひとたび問が見つければ、問はそのままに答である。何が正しいかは、いずれ歴史の中で自然が証明する。我々は、ただ科学の歴史を刻むだけである。やがて科学が進み理解が深くなった時には、現在の科学者は多かれ少なかれ、皆愚かである。科学を進めるということは、昨日までの自分が愚かであったことを示し続ける努力である。愚かさをさらけ出すことを恐れてはいけない。こじんまりとした小さな枠の中に科学を押し込めてしまふな。夢は大きく持て。ときめきは宝物。いつもこころはホームラン。

文献

- 1) サミー・ソーサ (1999) 「いつもこころはホームラン」
- 2) 原口徳子 (2000) 「21世紀は女の時代」細胞生物学会会報

[↑ページトップへ](#)